

3年4組 国語科学習指導案

平成 30 年 10 月 23 日 (火) 13:05~
 場 所: 3 年 4 組教室
 授業者: 河地 文恵

- (1) **ねらい** 学級の仲間が驚くような説明文を書くために、接続語や中心となる文を書き加えたり、順序を話し合ったりする活動を通して、構成メモを作り、それをもとに「中」を書くことができる。
- (2) **評価規準** 書く順序を考え、接続語や中心となる文を書き加えて「中」を書いている。【書くこと】
- (3) **評価方法** ワークシートの記述、自己評価カードで見届ける。

1 単元名 教材名

せつめいのくふうについて話し合おう
 『すがたをかえる大豆』【読むこと】
 れいをあげてせつめいしよう
 『食べ物のみみつを教えます』【書くこと】

2 指導の立場

(1) **教材観**
 『すがたをかえる大豆』は、「はじめ」「中」「終わり」の大きく3つに分かれている。「はじめ」の段落は、問題提起ではなく話題提示から始まるのが特徴である。「中」の段落は、並列の関係にあり、各段落の最初の文が、説明の中心になる文となっている。また、5つの事例が接続語を使って、加工の工程が簡単なものから複雑なものへと順に並んでいるなど、段落相互の関係についても理解を深めることができる。

『食べ物のみみつを教えます』は、読むことの学習を通して身に付けた力をもとに、疑問や興味をもった材料について図書資料で調べ、集めた情報を文章にまとめる学習である。

(2) 児童観

(3) 指導観

本単元では、意欲的に言語活動に取り組めるよう、「説明のくふうについて話し合い、みんながおどろくようなひみつブックを作る」という単元を貫く課題を設定した。読む学習で学んだことを活用できる場を効果的に位置付けるために、『食べ物のみみつを教えます』の言語活動を二次に入れ込むようにした。教材文から学ぶ説明書を書くための工夫を「書き技」とし、すぐに自分のひみつブックに生かせるように「はじめ」「中」「終わり」のまとまりごとに書いていくことで、児童の思考が途切れずに学習できるようにする。

3 本時の展開 (9/13)

	学習内容および学習活動	指導・援助 (★高め合うための指導・援助)
つ か む	1 前時までの学習を振り返る。 ・「中」の書き技を確認する。 だんだんびっくりするように書く。 つなぎ言葉を使う。 「～して食べるくふう」という文を書く。	<3つの見届ける一寒態を見届ける> ・前時の学習を理解しているかどうかを、発言やつぶやきで見届ける。 ・すべての書き技を確認する。書き技ごとに色分けをして、視覚的に分かるようにする。
	2 本時の課題を確認する。 みんながおどろくようなひみつブックを作るために、書き技を使って「中」を書こう。	★自分のひみつブックを書くためには、取材メモを並べ替える必要があることに気付かせ、課題につなげていく。
深 め る	3 「中」の文章構成を全体で確認する。 ・だんだんびっくりするように書く。 「見たい」「作り方」「日数」 ・つなぎ言葉を使う。 「いちばんわかりやすいのは」「つぎに」「さらに」	・教師の例文を使って構成メモを全体で作ることで、活動内容を理解できるようにする。
	4 取材メモを並べ替えて、自分の構成メモを作る。 うどんとパンではどちらが先かな。作り方が簡単なものは、うどんだと思うから先にしよう。	・自分なりの理由(見たい・作り方・日数)をもって、取材メモを並べ替えるようにする。 ・作業が進まない児童には、作り方の手順を教えさせ、そこから考えるように促す。
	5 構成メモをグループで交流する。 ・同じ材料グループで、どんな順番にしたかを話し合う。 わたしは、はじめにうどんにして、次にパンにしたよ。順番はあっているかな。 うどんは粉をねって作るけど、パンは発酵させるよ。パンの方が作り方が難しいから後でいいと思うよ。	★スマイルカードを使って、自信があるかどうかの意思表示をする。自信のない児童から、だんだんびっくりする順番になっているか理由を話し合うようにする。
	6 「中」を書く。 ・書き方の確認をする。 つなぎ言葉を始めに書く。 「～して食べるくふう」という文を書き加える。 ・下書き用紙に、「中」を書き進めていく。 ・書き終わったら見直しをする。	<3つの見届ける一学習状況を見届ける> ・机間指導をしながら、びっくりする順番になっているか、つなぎ言葉や「～するくふう」の文が書けているかどうかを見届ける。 ・書き進められない児童にはヒントカードを渡し、穴埋めをしながら書いていくようにする。 ★高め合いコーナーを作り、書き終わった児童からペアで読み合い、書き技が使えているところにシールを貼って確認し合うようにする。
ま と め る	7 全体交流をする。	・ワークシートを大型画面に映して、書き技ができていないか、全体で確認する。友達の助言で直せた児童の文章を紹介し、価値付ける。
	8 振り返りをする。 ・自己評価カードを書く。 やっぱりそうだ! (確信) うどんよりパンの方が作り方がむずかしいと思っていたら、〇〇さんも同じ考えだったから、自信がもてたよ。みんながおどろくようなひみつブックが書けたよ。	<3つの見届ける一定着状況を見届ける> ・自分の下書きを読み、書き技を使えているところにシールを貼って確認しているかどうかを見届ける。 ★【確信・変化・発見】の項目で分かったことを記述する。

4 研究内容との関わり

【研究内容Ⅰ】

②導入・課題化の工夫

ひみつブックを作る相手を学級の仲間とし、みんなが驚くようなひみつブックを作るために、書き技を見つけて文章を書き進めている。これまでに「はじめ」を書き、前時に「中」の書き技を見つけている。本時は書き技を使って「中」の下書きを書いていく。みんなが驚くように書くためにはどうすればよいかを問いかけ、「取材メモをだんだんびっくりする順番に並べ替えないといけない」という思いをもたせ、課題へつなげていくようにする。

【研究内容Ⅱ】

①関わりへの必然性を生むための工夫

書くことにおいて、児童は自分の書いたものが相手に伝わるように分かりやすく書けているのか、自信がもてない場合がある。そこで、グループ交流を位置付け、互いに分からないことや迷っていることを聞いたり、アドバイスしたりして納得できる構成になるようにする。本時のグループ交流では、はじめに、スマイルカードを使って、自分の考えに自信があるかどうかを意思表示する。自信のない児童から、だんだんびっくりする順番になっているか理由を理由をつけて発表していく。その際、自分が分からないことを解決するという目的をもった交流となるようにする。

③活動形態の工夫

交流をするグループは同じ材料別の3～4人になるようにする。自分が調べた材料なので、どの食品の変り方が驚くようなものなのか「作り方」や「日数」等から判断が付き、活発な意見交流ができると考える。

また、高め合いコーナーを作り、書き終わった児童からペアになり、文章を読み合う。書き技が使えているところにシールを貼って確認できるようにする。

【研究内容Ⅲ】

①評価の工夫 (自己評価力の育成)

学習計画を載せた評価カードを使用し、自分の変容を自覚できるようにする。カードには参考になった仲間の名前と、自分がどのように変容したか(確信: やっぱりそうだ!・変化: 考えが変わった!・発見: なるほど!)を振り返るようにする。